

| | |
|----------|---|
| 氏名 | やまもと あけみ 山本 明 美 |
| 学位(専攻分野) | 博士 (人間・環境学) |
| 学位記番号 | 人博第 369 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 19 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 研究科・専攻 | 人間・環境学研究科 共生人間学専攻 |
| 学位論文題目 | 『バイアーノの修道院』(1829) ——著者考証と「イタリアニスム」—— |

論文調査委員 (主査) 教授 岡田 温 司 教授 篠原 資 明 助教授 多賀 茂

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、1829年8月22日にパリで刊行された『バイアーノの修道院』(以下『バイアーノ』)の匿名著者「J… C… o」が、スタンダールであることを、テキストの綿密な解説と分析を通じて論証しようとするものである。これまでこのテキストは、スタンダール研究者たちによって、その著作から外されるか、あるいは無視されるかしてきたが、申請者は、文体素、イデオロギー素、言説の再生技法、「イタリアニスム」といった観点から、このテキストと他のスタンダールのテキストとを詳細に比較検討し、『バイアーノ』の作者が、スタンダールその人である可能性はきわめて高いことを、実証的に論証している。

論文の全体は5部からなる。くわえて、『バイアーノ』のインスピレーション源となった16世紀ナポリの古文書『キアラ、または16世紀秘話』(MS179)のイタリア語からの翻訳と、『バイアーノ』のフランス語からの翻訳が付録として添えられている。

まず「はじめに」では、問題の所在、研究史、方法論が述べられる。作者の同定にともなう方法論的な問題、すなわち、小説や旅行記や翻訳ものといったジャンルの違いによって文体が巧みに使い分けられること、さらにスタンダール自身がしばしば正体をくらませる語り口を好むこと(偽装趣味)、これらに関しても申請者はじゅうぶんに自覚したうえで、具体的なテキスト分析に当たる必要があることを強調している。

こうした観点から第1部では、『バイアーノ』と、他のスタンダール作品とが詳細に比較検討される。申請者は、形式(文体素)と内容(イデオロギー素)の両面から詳細な分析を試みている。文体素に関しては、文字や綴り(意図的な一字ミス、旧綴り、暗号趣味など)、特徴的な語彙(「奇妙な(サンギュリエ)」など)、文彩とトポス(フランソワ一世の警句など)、作者の作品紹介と視点の動きといった観点から、『バイアーノ』と他のスタンダールのテキストとの共通点が豊富に数え上げられる。一方、イデオロギー素に関しても、モラリスト的見識、イタリアの風俗や歴史に関する深い知識、カトリックの教会制度への批判精神といった点で、『バイアーノ』とスタンダール作品とのあいだに根本的な共通性があることが指摘される。形式と内容の両面からなされる比較検討から、『バイアーノ』がスタンダール自身の著作である可能性がきわめて高いという結論が導き出される。

第2部では、第1部の論証を踏まえて、「剽窃」をめぐる問題が考察される。『バイアーノ』とスタンダール作品とのあいだに多くの共通点が認められるとすれば、それは、『バイアーノ』の匿名作者がスタンダールを剽窃した結果とも考えられる。しかし、申請者はその可能性がきわめて低いことを論証する。たとえば、『バイアーノ』以後に出版されたスタンダールの13作品や、スタンダールの生前は公刊されなかった11作品にも、『バイアーノ』との共通要素が数多く見いだされるが、そのことはとりもなおさず、『バイアーノ』が剽窃されたわけではないことを物語っている。また『バイアーノ』には、スタンダールの『ローマ、フィレンツェ、ナポリ』(1827年)からの引用が盛り込まれている。さらに、『バイアーノ』出版のわずか2週間後に出版された『ローマ散策』で、スタンダールは、『バイアーノ』の種本となったナポリの「修道院廃止文

書」の「写本」を入手した旨を伝え、その後の著書（『イタリア年代記』の諸作品）でも、この「写本」を創作の土台としている。死後スタンダールの遺品のなかには、この「写本」（1820年版）と『バイアーノ』とがあったことも確実に知られている。こうした事情を考慮しても、『バイアーノ』が、匿名作者によるスタンダールからの「剽窃」ではありえず、スタンダールその人の著作であるという傍証が得られると、申請者は考える。

それでは、なぜスタンダールはあえて匿名で『バイアーノ』を出版したのか。その点を解明することが第3部の主眼である。申請者はこの問題を考察するにあたり、19世紀初頭の文学史、政治史、社会史、文化史といった広い文脈を視野に入れている。『バイアーノ』というテキストには、自由主義思想、過激な教会批判と揶揄、イタリアへの手放しの共感などが随所に散りばめられているが、こうした要素は出版当時のフランスの文壇ではかならずしも歓迎されるものではなかった。そのことが匿名出版のひとつの大きな理由であると申請者は論じる。さらに申請者は、スタンダール自身が他の著作においても、他人に成りすましたり、著者であることをはぐらかそうとしたりする「偽装趣味」の持ち主であった点も考慮すべきであると主張する。

以上を踏まえて、申請者は「結論」において改めて、論点を要約し、『バイアーノ』をスタンダール作とする論旨を確認している。さらに、「イタリアニスム」というスタンダール独特の用語法に注目し、「イタリア人特有の行動様式」という新しい意味で、この語がいち早く『バイアーノ』において登場していることを明らかにしている。この用語は、その後『ローマ散策』で重要な役割を果たすばかりでなく、イタリア通であったスタンダールの全著作を通じて鍵となるものである。その概念が『バイアーノ』に登場することは、その作者がほかでもなくスタンダールであることの証拠となる、と申請者は結論づける。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、これまで日本のスタンダール研究者がほとんど注目してこなかったテキスト、1829年8月22日にパリで刊行された『バイアーノの修道院』（以下『バイアーノ』）を取り上げ、その匿名著者「J…C…o」が、スタンダール本人である可能性のきわめて高いことを、テキストの綿密な解説と分析を通じて実証的に論証しようとするものである。本論文の主たる対象は、比較的未知の1篇のテキストであるとはいえ、スタンダールのあらゆるジャンルの作品、彼の思想、さらには同時代の文化・社会状況について、広くて深い知識を有していなければ書けない論文であり、その問題意識と成果は高く評価できる。さらにくわえて、『バイアーノ』のインスピレーション源となった16世紀ナポリの古文書『キアラ、または16世紀秘話』（MS179）のイタリア語からの翻訳と、『バイアーノ』のフランス語からの本邦初の翻訳が付録として添えられており、資料としての価値もひじょうに高い。

論文の全体は5部からなる。「はじめに」では、問題の所在、研究史、方法論が述べられる。申請者はまず、デル・リットやマルティノらといった過去の優れたスタンダール研究者たちの説を批判的に検討し、研究史上における問題の所在を明確にする。その上で新たに、文体素、イデオロギー素、言説の再生技法、「イタリアニスム」といった観点から、『バイアーノ』と他のスタンダールのテキストとを詳細に比較するという、本論文の方法論を導き出している。その手続きは、明快にしてかつ正当なものである。

こうした観点から第1部では、『バイアーノ』と、他のスタンダール作品とが詳細に比較検討される。申請者は、形式（文体素）と内容（イデオロギー素）の両面から細部にわたる分析を試みている。たとえば、文体素に関して言えば、文字や綴り（意図的な一字ミス、旧綴り、暗号趣味など）、特徴的な語彙の用法（「奇妙な（サンギュリエ）」）などの点で、『バイアーノ』がいかにスタンダールのな特徴を数多く持っているかが、具体的に論証されている。一方、イデオロギー素に関しても、モラリスト的見識、イタリアの風俗や歴史に関する深い知識、カトリックの教会制度への批判精神といった点で、『バイアーノ』とスタンダール作品とのあいだに根本的な共通性があることが指摘される。この第1部は、作者の考証に当たって、実証的な手続きとして必要不可欠の部分であり、申請者の分析は十分にその目的を満たしていると判断できる。

第2部では、第1部の論証を踏まえて、「剽窃」をめぐる問題が考察される。『バイアーノ』とスタンダール作品とのあいだに多くの共通点が認められるとすれば、それは、『バイアーノ』の匿名作者がスタンダールを剽窃した結果とも考えられるからである。しかし、申請者はその可能性がきわめて低いことを、とりわけ各テキストの出版年と出版事情を詳細に調べ

ることによって論証している。たとえば、『バイアーノ』以後に出版されたスタンダールの13作品や、スタンダールの生前は公刊されなかった11作品にも、『バイアーノ』との共通要素が数多く見いだされるが、そのことはとりもなおさず、『バイアーノ』が剽窃されたわけでないことを物語っている。テキスト内部に焦点を合わせた第1部に加えて、この第2部では、テキストの周辺状況から作者スタンダール説が説得的に傍証されている。

とするなら、なぜスタンダールはあえて匿名で『バイアーノ』を出版したのか。その点を解明することが第3部の主眼である。申請者はこの問題を考察するに当たり、さらに視野を広げて、19世紀初頭の文学史、政治史、社会史、文化史といった文脈を考慮に入れている。『バイアーノ』というテキストに盛り込まれた自由主義思想、過激な教会批判と揶揄、イタリアへの手放しの共感などといった要素は、出版当時のフランスの文壇ではかならずしも歓迎されるものではなかったが、そのことが匿名出版のひとつの大きな理由であると申請者は論じる。テキスト内部から同心円状に議論を広げ、もう一度テキストへと戻ってくる本論文のスタイルは、その作者を同定する上できわめて効果的なものである。

以上を踏まえて、申請者は「結論」において改めて論点を整理し、『バイアーノ』をスタンダール作とする論旨を確認している。とりわけこの「結論」では、「イタリアニスム」というスタンダール独特の用語法に注目し、「イタリア人特有の行動様式」という新しい意味で、この語がいち早く『バイアーノ』において登場していることを明らかにしている。この点は、これまでのスタンダール研究において明確にされてこなかったことである。

申請者は、匿名のテキスト『バイアーノ』をスタンダールという大作家の作として同定するにあたり、この問題をめぐる主な研究者たちの見解を手際よく整理したのち、何が問題で、何が解決されていないかをしっかりと見極めたうえで、自分の議論を展開していく。イタリア語原典との緻密な照合を試みるなど、文学研究の基本である実証的な解読や手続きにも遺漏がない。スタンダールがイタリア通であったことはよく知られているが、日本のスタンダール研究において、このテキストに注目して、文体と思想の両面にわたってこれほどまで深く掘り下げて解読・分析を試みたものは、本論文が最初である。その意味でも本論文は、共生人間学専攻思想文化論講座にふさわしいすぐれた内容を備えたものと判断される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年2月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。